

坂戸工作所⑮

北野靖志の「元氣が行く」

現場リポート・元氣印経営の秘密

さる五月二十六日。快晴で

なものを

穏やかな日曜日の午後、千葉市花見川区・鉄工団地の坂戸工作所は親子連れの歓声に包まれた。洗ったての真っ白な作業着を着こんだ社員たちがテキパキと工場内に設けた式場に案内する。

車いすや白いつえを手にした子供たちを囲むように父母や学校関係者たちが座った。やがて社長の坂戸誠一が大きな

《坂戸工作所》
社長＝坂戸誠一氏
住所＝千葉市花見川区
☎043・259・0131
業種＝解体機械製造業
資本金＝5720万円
設立＝1945年4月
従業員数＝30人
年間売上高＝9億円
(2002年度見込み)

いう。

「うちの社員たちはいつも絵に見守られながら仕事をしている幸せ者です。おかげでがんばらねばと、逆に励まされるんですよ」

坂戸は父の正四郎を「創業御先代」と尊敬してやまない。モノづくりの大先輩とし

工場内に障害者美術展示場

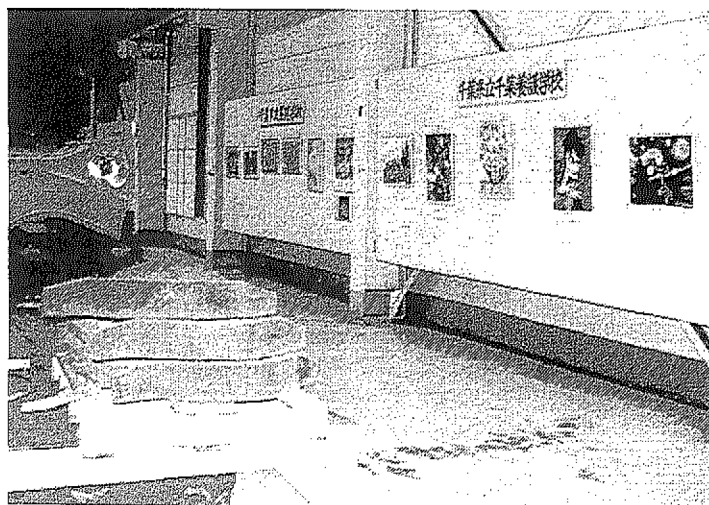
な声であいさつを始めた。

平成三年十一月、新機械工場の落成を記念して、創業者の名前をかぶせた「坂戸正四郎記念障害者美術展」を設けた。きっかけは長年にわたって同社の経営指導にあたった千葉県中小企業総合相談所の堀田捷郎指導課長(当時)の一言。「工場を作るのなら中に絵を飾れるくらい、きれいな

報恩②

いる。累計で一千五百人もの子供たちを表彰した。今回は第二十二回目の表彰式。子供たちの作品は次回の表彰までのほぼ半年間、工場内の展示コーナーに飾られ、希望者はいつでも見学できる。坂戸は

ではもちろんだが、吉田克定と芳野重正の二人の「大恩人」をひき合わせてくれた。一九八〇年(昭和五十五年)二月、父、正四郎が運転中に心筋梗塞に襲われ急死。誠一が急きょ、社長に就いた経営ピンチのとき、吉田は「経理や総務を見てあげるから心配するな」といって以後週三回出社してくれた。



常時、県内の養護施設の子供の絵を展示している坂戸工作所のギャラリー・ファクトリー

だった。

同社の各工場内にはところどころに「報恩」と書かれた額と創業者の写真が並べてかけてある。

「これまでいろいろな人に助けていただいた。だから社会に恩返しするのは私の義務なんです」――坂戸の目が輝いた。

(この項終わり。次回は藤井製作所です)

|| 文中敬称略 ||
(論説委員長)

建機業界で有名な技術者だった芳野は「中小企業だからこそ高品質、高性能の製品を作らなければ。安い、壊れやすいではやっぱり中小企業の製品だといわれるよ」と、誠一の懇請に応え、技術担当最高顧問に就任、技術指導役をかってくれた。

二人とも父、正四郎と戦前、油谷重工時代の仲間で、功も名も成した人ばかりだが、「最愛の友へのはなむけだ」と、駆けつけてくれたの